

雲南省西双版纳 —少数民族と熱帯照葉樹林自然保護区 2000km の旅

長谷川信美

宮崎大学名誉教授

1. はじめに

第12回雲南懇話会 Field Work として、雲南省西双版纳（シーサンパンナ、シブソンパンナー）タイ族自治州を訪問した。期間は2016年10月28日から11月7日までの10日間で、10名が参加した。

雲南省には25を越える少数民族が居住している¹⁾。西双版纳は、景洪周辺はタイ（傣）族、山間地はジノー（基諾）族、プーラン（布朗）族などが居住している。今回の旅の目的は、少数民族の歴史と生活文化に触れ、自然環境を観察することであった。

全日程を同行いただいたのは雲南大学民族研究院 尹紹亭教授で、雲南大学バス（運転手：蔡さん）により総距離2000kmを移動し、少数民族の村と自然公園などを訪ね歩いた。また、雲南大学民族研究院博士課程2年 村上めぐみさん（日本人留学生、中国語通訳）、この年の7月に雲南師範大学を卒業された黎寧さん（日本語通訳）、雲南師範大学卒の石静さん（英語通訳）と王晶さん（世話係）も同行した。

雲南懇話会 Field Work は今まで雲南省を対象区域として6回（2005、2006、2008、2009、2010、2011年）実施され²⁻⁹⁾、そのうち4回は尹教授にご案内いただいている⁹⁾。雲南省訪問は今回が7回目、尹教授にお付き合いいただくのは5回目となる。尹教授は文化人類学、文化生態学、民族地理学が専門で、雲南の少数民族の生態、焼畑と農耕文化研究の第一人者である¹⁰⁻¹³⁾。焼畑は日本全国の山間地で行われてきた農法¹⁴⁾で、私の住んでいる宮崎県では現在も椎葉村で行われており、この地域は2015年にFAO世界農業遺産に登録されている。また、村上めぐみさんは少数民族の植物利用に関する研究者である¹⁵⁻¹⁹⁾。

参加者の多くは雲南懇話会 Field Work に何度も参加された方々で、また東南アジアで仕事をされてきた方も多かった。私は初めての参加で、雲南省に接する青海省へは調査に行っていた²⁰⁾が、雲南省は初めての訪問である。また、西双版纳にはIUCN Red ListでVU評価の野生牛ガウル (*Bos gaurus*)²¹⁾とEN評価のアジアゾウ (*Elephas maximus*)^{22, 23)}が生息している。姿を見るのは無理でも、生息環境を知りたいという思いもあって参加した。

全日程を参考資料に示した。この中から主要な訪問地について経過とともに報告する。

2. 景洪

10月27日に6人が成田を出発し、上海で関空発の2人と合流、昆明を経由して景洪に到着したのは10月28日9時25分だった。27日23時には到着の予定だったが、上海で搭乗機の出発が大幅に遅れ、昆明に着いたのは28日1時30分で、乗り継ぎ便には間に合わず、航空会社の準備したホテルに宿泊した。景洪空港で、タイ経由で前日到着の2人（昆明で合流するはずだった）、尹教授と同行者の皆さんと合流し、雲南大学バスで宿泊するホテルへ向かった。

夜に瀾滄江（メコン川）クルーズ船に乗船した。この河は雲南省の北に接する私の調査地青海省玉樹藏族自治州に源を発している。大勢の観光客が喧噪の中で列をなし乗船を待っていた。待つこと1時間ほどで歓迎の踊りの中を通り乗船し、船内個室で夕食、踊りや歌の上演もあり、デッキに出て滔々と流れる河の流れを見つめ、写真を取り合い、親交を深めた。瀾滄江に架かる大橋も兩岸のホテルも派手にライトアップされていた。

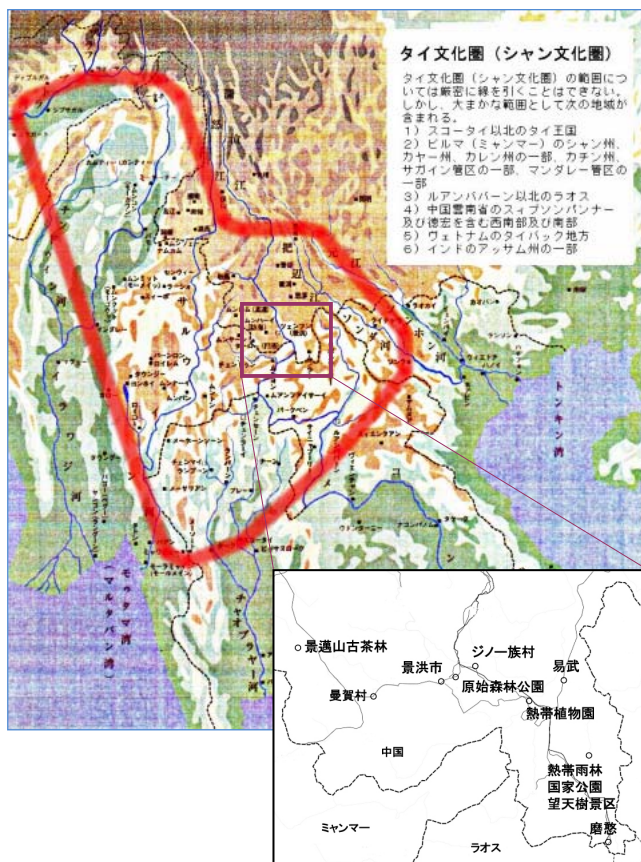


図1 シーサンパンナ、主要な訪問地 (2016年10～11月)

タイ文化圏の地図：新谷忠彦、クリスチャン・ダニエルス、園江満編著「タイ文化圏の中のラオス 物質文化・言語・民族」東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 2009年発行。P8、「タイ文化圏概略図 (新谷原図より眞島健吉作成)」この概略図のカラー版を制作し、右図を加えました。(雲南懇話会、前田栄三、遠藤州)

3. 景邁山古茶林とプーラン(布朗)族村

10月29日8時30分に景洪を出発し、標高1600mのプーラン族村に到着したのは15時10分であった。景邁山古茶林を見学した(写真1)。景邁山古茶林は1000年以上続く野生種の茶樹園で、茶摘みは手摘みで行われている。案内人が木に登って若芽を摘み取って見せてくれた(写真2)。樹齢1000年の古木があると聞いていたが既になく、看板のみが抜かれて置いてあった。FAO世界農業遺産に登録を申請中とのことであった。牛の糞があった。

続いて景観保存地区となっているプーラン族村を訪問した(写真3)。狭い石畳の道の両側に高床式の家が連なり、赤色野鶏 (*Gallus gallus*)²⁴⁾ によく似た毛色のニワトリが歩き回っていた(写

真4)。駐車場には野生種茶葉などを売る土産物店が並び、売り手の年配の女性に飲みやすいと勧められた発酵茶を購入した。

宿泊したホテルはプーラン族文化園となっている寺院の敷地内にあった。寺院の壁にはプーラン族の伝記が描かれていた(写真5)。寺院に通じる道路脇の小屋で豚2匹が飼育されており、女性が世話をしていた。

10月30日には、午前中に芒洪八角塔、茶祖廟、蜂神村(蜂の巣のたくさんついている巨木)を見学した。蜂神村ではサンコウチョウに似たさえずりが聞こえた。移動し14時半過ぎに南糯山ハニ族村へ到着した。



写真1 景邁山古茶林で記念撮影。



写真2 天然茶樹の摘み取り。



写真3 景観保存地区プーラン族村。



写真4 赤色野鶏によく似た毛色のニワトリ。



写真5 寺院の壁に描かれたプーラン族伝記。



写真6 南糯山ハニ族村の女性の民族衣装。

4. 南糯山ハニ(哈尼)族村

ハニ族村では、昼食を摂りながら、黒地に赤や青の刺繍をした民族衣装を着たハニ族の女性3人が歌と踊りを披露してくれた(写真6)。地声を張り上げ響かせて歌う独特の発声法だった。

現在地には1966年に移住し標高1200mで、以前の村は5km離れた標高1600m、現在は森林になっている。移住した理由は、道路ができ学校や病院に通うのが便利になったからとのことだった。ハニ族は山地部で茶葉栽培や焼畑耕作を行ってきた民族であるが²⁵⁾、焼畑は1980年代に禁止となり現在は行っていない。村の人数は416人、収入源は茶葉の販売で、自分で加工し仲買人に売る、水田は自家用で魚の養殖もしており、トウモロコシとマカダミアナッツも収穫していると話してくださった。

また、村に隣接する森との境界の門を見学した(写真7)。門に付与された意味の一つは外来の悪から村を守ることでありと報告されている^{26, 27)}。村上さんによると、この門は人の出入りするロンバ門(結界入口)で、亡くなった人が出入りする門は別にあるとのことである。

5. 西双版纳原始森林公園

10月31日、西双版纳原始森林公園を訪れた。タイ族、ハニ族、ワ族などの民族舞踊ショーと象が観光客に鼻で水をかける水掛祭りショーを見学し、遊歩道で熱帯照葉樹林の巨木の中をガイドとともに歩いた(写真8)。遊歩道の柵の手すりやそばの木にはアカゲザル(*Macaca mulatta*)²⁸⁾がいた(写真9)。ニホンザルに似ているが尾が長く太い。観光客が与えたのかパンのようなものを食べている個体、近づく人を威嚇する個体もいた。バナナを持ったサルが描かれた餌を与えないよう注意を促す看板があった。聞いたことのない野鳥のさえずりが聞こえた。ガイドに尋ねると、ハチドリとのことであった。

大きな緑色のウシの像があった。尹教授はこの公園周辺は野生牛の生息域になっていると話されていた。展示室にはアジア象、黒熊、野猪などの写真が掲示され、動物や鳥類の剥製、蝶類標本も展示されていたが、ゆっくり見る時間はなかった。アイニ族村で民族衣装などの展示や長い竹をまたいでおどる踊りを見学した。昼食は「森林公園孔

雀庁」であった。クジャクショーがあり、笛を吹き餌を撒くと対岸から多数のクジャクが飛来した。

6. 曼听公園、西双版纳南伝仏教總仏寺、「傣秀」民族ショー

夕方に曼听御花園景区(曼听公園)で庭園を歩き、西双版纳南伝仏教總仏寺を見学した。金色に輝く仏像に参拝客が大きな線香を供えていた。

夜には「傣秀」民族ショーを観覧した。円形劇場で水を大量に使用した神秘的な演出のアクロバティックなショーであった。村上さんの説明によると、シーサンパンナの伝統的な「森と人間との共生」がこのショーの大きなテーマで、ストーリーは、タイ族の古い叙事詩「孔雀皇女」の話に基づいているとのことだった。尹教授がこのショーの観覧を企画されたのは、雲南の少数民族が森とともに生きてきた人々である²⁹⁾ことを我々に知ってほしかったのだろうと感じた。

7. 中国科学院西双版纳熱帯植物園

11月1日には11時から14時まで、中国科学院西双版纳熱帯植物園を見学した。広い池にピンク、白、紫などの蓮の花が咲き、水辺にはジュズダマが実を付けていた。ヤシ、タケからラン、ワラビまで多種多様な熱帯雨林の植物種が展示されていた。博物館には種々の動物や鳥類の剥製、蝶の標本が展示されていた。

園内のレストランで昼食をとり、易武へ向かった。下り坂のカーブでトラックが横転し道路をふさいでいた。バス運転手の蔡さんがトラック荷台後部の板を外し、何とかバスが通れるだけの幅を確保した。すごい、さすが蔡さんと皆感心した。

8. 易武

17時30分に易武に到着した。坂を上り、易武茶文化博物館を見学した。茶馬古道³⁰⁾の経路図が展示されていた。馬のキャラバンが家族に別れを告げて出発した、茶馬古道の起点となる古木に囲まれた広場へ行った(写真10)。戻る途中で豚の臭いがした。

案内役は、古樹茶の買い付け、加工、販売(昆明に店を持つ)を行っている陳劍さんである。陳さんは生産農家を回って高品質の茶葉だけを買



写真7 ロンバ門 (結界入口)。



写真8 西双版纳原始森林公園。



写真9 原始森林公園のサル。



写真10 茶馬古道起点。ここから家族に見送られてキャラバンが出発した。



写真11 地上 36m の望天樹景区空中回廊。



写真12 レストラン階段にいたトカゲ。

付け、易武の工場で加工（蒸して圧力をかけ乾燥）している。易武では500戸が茶の生産に従事し、女性は毎日茶葉の摘み取りをする。企業は山を50～60年間の賃貸契約し、賃金を支払って茶畑の管理、生産から加工、販売まで行うとのことであった。

9. 西双版纳熱帯雨林国家公園望天樹景区

11月2日8時30分に易武を立ち、10時50分に西双版纳熱帯雨林国家公園望天樹景区へ到着した。途中で西双版纳易武州級自然保護区を通過した。尹教授によると、この付近には野生牛が息しているという。野生象出没注意の看板があったと村上さんが教えてくれた。後でこの付近の写真を確認すると、川岸の土に足跡と思われる凹みが多数あった。

望天樹空中走廊で地上36m水平距離500mのキャノピーウォークを楽しんだ（写真11）。一度見たいと思っていた熱帯雨林の階層構造を思いがけず観察することができた。しかし尹教授も村上さんも高所は苦手ようで、すぐに下りてしまった。

「雨林餐厅」で昼食を取った。鳥のメジロに似た地鳴きが聞こえ、ダイサギが飛んだ。階段で茶色の大きな長い尾のトカゲが、これも大きなきれいな緑色の羽の昆虫を頭からくわえ動かなかった（写真12）。

10. タイ族村曼賀

昼食後にタイ族村の曼賀を見学した。高床式住居を見せてもらった。2階は天井がなく壁板は隙間があった（写真13）。築25年で、立て替え準備中とのことだった。1階には立て替え用の木材と大型のバイク、プラスチック桶などが置かれ、梁から投網が下がり、台所があった。

タイ族の村には、必ずお寺があり、村建設の時に植えたガジュマルの木がある（写真14）。その太さが村の歴史を示すとのことだった。

11. 磨憨

11月3日はラオス国境の町磨憨を見学した（写真15）。大型トラックが何台も止まっている。中国人がラオスで茶を栽培し、プーアル茶として売っているという。出入国管理事務所を見学し、

土産物市場を訪れた。ラオス人が薬草、果物、蜂蜜などを売っている。腰痛で参加できなかった安仁屋さんへのお土産に、痛み止めの塗薬を購入した。磨憨総合集贸市场（野菜市場）を見学した（写真16）。種々の野菜とともに、豆腐、こんにゃく、ウナギ、卵、籠に入れた生きた鶏も売られていた。

12. ジノー（基諾）族村

11月4日にジノー族村を訪問した。景洪から55km、標高670mである。標高1000mのところにあった村を3つに分村（老村、中村、小村）し、2つは標高の低いところに移住した。訪問したのは一番低いところに移住した村である。

博物館だった朽ちた建物を見学した（写真17）。尹教授が経緯について説明して下さった。1985年頃に尹教授が私費を投じ、山中にあった6家族が生活していた大きな建物を移築し、道路を整備した。5万人の観光客を呼ぶ計画だった。開館時は踊りでにぎやかだったが、焼畑、狩りや採集で生きてきた人々は、村の中を観光客が歩くことを嫌い、建物の管理をしきれなくなり、当初の構想は実現しなかった。

若い女性は適応力が高く、村の外に仕事を見つけて出て行ったが、若い男性は仕事が見つからず、また仕事に就いてもつらくて戻ってきた。道路の上部は家と畑になっており、道路の下側と周囲の森林で焼畑を行っていたが、自然保護区となって焼畑はできなくなった。現在はゴムの栽培（写真18）と補助金で生活している。イネの栽培もやめてすべてゴム林にしてしまった。米は購入している。

村の家で昼食をとった。雲南省級非物質文化遺産伝承人の前村長（写真19）が三弦の楽器や笛を演奏し、歌を披露して下さった。前村長のおばあさんは100曲以上を歌うことが出来たというが、亡くなって多くが失われてしまった。前村長は53曲を歌うことが出来る。尹教授が、調査に来ていたときには、夜に糸繰車を回しながら歌われる歌を聞いた、ジノー族の文化はタイ族よりも豊かで多様性に富むと述べられた。

家の周りで蝶がたくさん舞っていた。写真20はその中の一種 *Delis hyparete*³¹⁾ で、撮影は速水宏さんである。速水さんはこのツアーの間に60種ほどの蝶を撮影している。



写真 13 高床式住居 2 階。



写真 14 「曼賀」タイ族村のガジュマルの木。



写真 15 中国とラオスとの国境。



写真 16 磨憨総合集贸市场 (野菜市場)。



写真 17 ジノー族博物館。



写真 18 ジノー族村周囲の山はゴム林。



写真19 雲南省級非物質文化遺産傳承人の前村長さん。



写真20 ジノー族村で観察した蝶。



写真21 水田。



写真22 バナナ畑。



写真23 茶畑。



写真24 雲南映象の群舞。

家の横に収穫したゴムを加工する小屋があり、円形に固めたゴムが置いてあった。前村長は1000本、多い人で3000本を管理している。ゴムの樹液は4月から11月まで、木1本から2日に1回午前2時に採取する。200本の液20kgを9円で

仲買人に売っている。

尹教授から西双版纳の農業についてお話をうかがった。標高の低い盆地では水田(写真21)とバナナの栽培(写真22)が行われている。標高800mまではゴム³²⁾、800m以上は茶(写真23)

を栽培している。ゴムは植えてから8年は収穫できず、その後8年収穫する。ゴムは水を多く必要とし、病気予防に農薬を使うので環境汚染になる。適正間隔よりも密植するので光が入らず下草が生えず、さらにゴムを乾燥するのに薪をたくさん使うため木を伐採し、森林環境を破壊する。茶はゴムよりも水を必要とせず環境に優しい。また、以前は各戸で牛を飼育していたが、今ではほとんどいなくなってしまった。お祭りに使用する牛はラオスまで買いに行っている。

13. 普洱市—墨江—玉溪—昆明

ジノー族村から普洱市まで移動して宿泊し、5日に美術館と博物館を見学し、墨江を経て玉溪に宿泊、6日に玉溪の聶耳公園を散策し玉溪博物館見学後、夕方に昆明に到着した。高速道と鉄道の建設が進んでいた。尹教授が、昆明から西双版纳に調査に来るのに、バスで1980年代は5日、90年代は3日かかったが現在は1日になったと話された。学園都市の呈貢でお別れ会をした。昆明市内で、夕食に過橋米線³³⁾を、昆明で一番有名な「橋香園過橋米線」店で味わい、雲南芸術劇院で「雲南映象」を観覧した。少数民族の迫力ある群舞(写真24)があり、ヤン・リーピンに代わるヤン・ウーの孔雀の舞を鑑賞した。11月7日に昆明空港より帰国した。

14. おわりに

今回初めて中国南部の熱帯照葉樹林地帯に生きる少数民族を訪れた。短期間の滞在だったが、少数民族の人々の生活、文化、歴史と産業を垣間見ることができた。自然と共生してきた焼畑という古来からの生産方式が禁じられ、単一作物大規模栽培により、生態系の生物多様性が失われ、固有文化の継承も困難になり、自然保護政策がさらに追い打ちをかけていた。生態系に含まれる生物多様性の増加は炭素蓄積などの生態系サービスを高める³⁴⁾。観光資源³⁵⁾としての文化の保存と自然保護に終わることなく、将来、少数民族の方々の固有の生産方式と生活文化が再評価され、豊かな自然を自分たちの手に取り戻すときが来ることを願って、西双版纳を後にした。

謝辞

全行程に同行し、懇切丁寧にご説明下さった雲南大学民族研究院 尹紹亭教授に心より感謝申し上げます。また御著書に加え私が探していた雲南の野鳥図鑑までいただきました。ご親切にご配慮に重ねて御礼申し上げます。同行しお世話いただいた4人の方々、そして運転手の蔡さんにも、皆さんのおかげで楽しく無事に旅程を終えることができましたことに、感謝申し上げます。

参考資料

1. 参加者と担当

長谷川信美(団長)、清水信吉(副団長・写真共有アルバム制作)、前田栄三(Coordinator)、井上義一(時間記録)、岩脇康一(世話役・写真記録)、遠藤州(世話役・現地会計・写真記録)、岡邦俊、田原健司、成田耕治、速水宏。(1名、出発直前に腰痛のため参加辞退。)

2. 日程

- 10/27(木) 出国(本隊8名)
- 10/28(金) 景洪空港にて10名合流、夜、瀾滄江(メコン河)クルーズ、夜市を散策、景洪泊
- 10/29(土) 景邁山古茶林、景観保存地区(プーラン族村)、プーラン族村泊
- 10/30(日) 八角塔・茶祖廟・蜂神村、南糯山ハニ族村、景洪泊
- 10/31(月) 西双版纳原始森林公園(アイニ族村)、曼听公園、「傣秀」民族ショー、景洪泊
- 11/1(火) 中国科学院西双版纳熱帯植物園、易武茶文化博物館、茶馬古道始点に立つ。易武泊
- 11/2(水) 西双版纳熱帯雨林国家公園、タイ族村「曼賀」、勐腊泊
- 11/3(木) 磨憨(国境税関、土産市場、野菜市場)、傣族村、南腊河傣族集落、勐腊泊
- 11/4(金) ジノー(基諾)族村、普洱泊
- 11/5(土) 普洱市(美術館、博物館)、墨江(北回帰線公園)、玉溪泊
- 11/6(日) 聶耳公園、玉溪博物館、呈貢(学園都市)、昆明(夕食:過橋米線)、雲南芸術劇院、昆明泊

11/7(月) 帰国

参考文献

- 1) 栗原 悟：雲南の多様な世界—歴史・民族・文化。大修館書店，東京，2011: 136-137.
- 2) 秋畑 進：シブソンパンナー、茶馬古道、援蔣ルート of 戦跡を訪ねて。ヒマラヤ学誌 9: 264-272, 2008.
- 3) 前田栄三：雲南の山地少数民族の村々を訪ねて 2008 年秋。ヒマラヤ学誌 11: 222-231, 2010.
- 4) 神山 巍：雲南南部山地の少数民族の村々を訪ねて。ヒマラヤ学誌 11: 270-277, 2010.
- 5) 前田栄三：雲南省南部・ヴェトナム国境地域を訪ねて—2009 年 11 月—。ヒマラヤ学誌 12: 198-208, 2011.
- 6) 神山 巍：雲南省西北部茶馬古道沿いの少数民族を訪ねて。ヒマラヤ学誌 13: 331-340, 2012.
- 7) 岡 邦俊：旅行者と研究者とのはざままで—雲南懇話会中国法制研究会の活動報告—。ヒマラヤ学誌 14: 255-263, 2013.
- 8) 上原美奈子：茶文化交流の向こうにあるもの。ヒマラヤ学誌 14: 264-272, 2013.
- 9) 安仁屋政武，前田栄三：雲南懇話会 10 年の歩みと「第 30 回記念特別講演会」。ヒマラヤ学誌 16:170-175, 2015.
- 10) 尹紹亭：雲南の焼畑—人類生態学的研究—。農林統計協会，東京，2000: 1-240.
- 11) Yin S: People and Forests—Yunnan Swidden Agriculture in Human—Ecological Perspective. 云南教育出版社，昆明，2001: 1-560.
- 12) 尹紹亭（白坂 蕃訳／林 紅翻訳協力）：雲南の刀耕火種（焼畑農耕）及びその変遷。ヒマラヤ学誌 10: 225-237, 2009.
- 13) 黄绍文，尹紹亭：中国云南哀牢山区哈尼族梯田传统农耕生态文化与变迁。ヒマラヤ学誌 12: 182-197, 2011.
- 14) 佐々木高明：日本の焼畑—その地域比較的研究—。古今書院，東京，1972: 1-446.
- 15) 村上めぐみ：アメリカ三大自然史博物館の中国少数民族コレクションに関する比較調査報告：フィールド自然史博物館（シカゴ）およびアメリカ自然史博物館（ニューヨーク），スミソニアン国立自然史博物館（ワシントン D.C.）の事例。龍谷大学大学院国際文化研究論集 8: 85-101, 2011.
- 16) 稲村 努，村上めぐみ：北西ラオスのアカ族における植物知識および西双版纳州の商品作物市場調査報告。地理歴史人類学論集 5: 89-115, 2014.
- 17) 村上めぐみ：「中国雲南省ハニ族によるハニ文字の普及活動」：中国政府による民族文字政策と民間における民族文字運動の相違を中心に。龍谷大学大学院国際文化研究論集 4: 52-71, 2007.
- 18) 村上めぐみ：ハニ族の色彩語彙と認識：中国雲南省紅河州と西双版纳州のハニ族を事例として。東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要 14: 131-144, 2015.
- 19) 村上めぐみ：ハニ族の農作物の分類方法を探る：中国雲南省緑春県のハニ族を中心にして龍谷大学大学院国際文化研究論集 3: 45-59, 2006.
- 20) 長谷川信美：高山草原における少数民族による草食家畜の放牧方式調査概要。ヒマラヤ学誌 17: 138-145, 2016.
- 21) Duckworth JW, Sankar K, Williams AC, Samba Kumar N, Timmins RJ. 2016. *Bos gaurus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e.T2891A46363646.
- 22) Choudhury A, Lahiri Choudhury DK, Desai A, Duckworth JW, Easa PS, Johnsingh AJT, Fernando P, Hedges S, Gunawardena M, Kurt F, Karanth U, Lister A, Menon V, Riddle H, Rübél A, Wikramanayake E (IUCN SSC Asian Elephant Specialist Group). 2008. *Elephas maximus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2008: e.T7140A12828813.
- 23) Sukumar R: A brief review of the status, distribution and biology of wild Asian elephants. *International Zoo Yearbook* 40: 1-8, 2006.
- 24) BirdLife International. 2016. *Gallus gallus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e. T22679199A92806965.
- 25) 川野明正：雲南の歴史—アジア十字路に交差する多民族世界。白帝社，東京，2013: 36, 48-49.

- 26) 稲村 努：ハニ族の村門—西双版纳ハニ族の階層とリニジの動態—。比較民族研究 5: 175-186, 1992.
- 27) 須藤 護：雲南省ハニ族の生活誌—移住の歴史と自然・民族・共生。ミネルヴァ書房, 京都, 2013: 100-105.
- 28) Timmins RJ, Richardson M, Chhangani A, Yongcheng L. 2008. *Macaca mulatta*. The IUCN Red List of Threatened Species 2008: e. T12554A3356486.
- 29) 大崎正治・杉浦孝昌・時雨 章 (比嘉政夫監修)：森とともに生きる中国雲南省の少数民族—その文化と権利。明石書房, 東京, 2014: 1-336.
- 30) 小林尚礼：東チベットの古道調査その1 香格里拉から徳欽までの茶馬古道。ヒマラヤ学誌 10: 150-060, 2009.
- 31) 陳明勇・李正玲・王愛梅・刘正勤：西双版纳蝶類多様性。雲南出版集团公司・雲南美術出版社, 昆明, 2012: 47.
- 32) 深尾葉子：ゴムが変えた盆地世界—雲南・西双版纳の漢族移民とその周辺—。東南アジア研究 42: 294-327, 2004.
- 33) 茂田井円：雲南の食の世界～過橋米線のふるさとを訪ねて～。ヒマラヤ学誌 11: 258-269, 2010.
- 34) 山下聡・岡部貴美子・佐藤保：森林生態系における生物多様性と炭素蓄積。森林総合研究所研究報告 12: 1-21, 2013.
- 35) 前田直人：西双版纳傣族自治州の民族観光における文化表象の交錯—民族であるための方法について—。国際開発研究フォーラム 24: 163-178, 2003.

Summary

Visiting Xishuangbanna — 2000 km to the Villages of Minolities and the Nature Reserves of Tropical Laurel Forest

Nobumi Hasegawa

Professor Emeritus, Miyazaki University

As 12nd Field Work of Yunnan Forum, the 10 members traveled around Xishuangbanna through 2000km with Prof. Yin Shaoting, Yunnan University from 28 September to 6 October, 2016.

We visited the villages of Bulang, Hani, Tai and Jinuo minority groups, learned their history and cultures, and appreciated their musics and dances. We watched the old tea tree forest in Jinmai Mountain, the plantations of tea, rubber and bannana and the paddy fields. We observed the tropical laural forests and various species of plants, birds, buterflies and insects and some species of animals and birds in Jinhong Primitive Forest Park, Xishuangbanna Tropical Rainforest Park, Xishuangbanna Tropical Botanical Garden and the surrounding sites.

The minolity groups is inhibited their traditional swidden agriculture by Chinese government and many of them earn their livings from the plantations of rubber and tea which resulted in the deterioration of biodiversity and ecosystem services in tropical laural forest of Xishuangbanna.